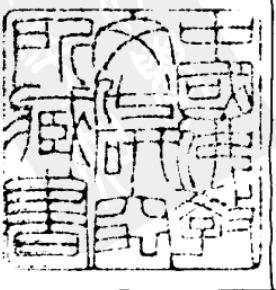
000371

弘法大師 空海全集

第八巻



筑摩書房

訳注・解説者（五十音順）

遠藤祐純（えんどう　ゆうじゅん）
大正大学助教授

真保龍敞（しんぼ　りゅうしょう）
大正大学講師

福田亮成（ふくだ　りょうせい）
大正大学助教授

弘法大師空海全集　第八巻

昭和六十年九月十五日　初版第一刷発行

編者　弘法大師空海全集編輯委員会
京都市東山区東山七条　総本山智積院内
真言宗智山派
宗祖弘法大師千百五十年御遠忌奉修局
代表　高野一能
編輯代表　宮坂宥勝

発行者　布川角左衛門

発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(291)七六五一(営業)
東京(294)六七一一(編集)
振替　東京　六―四一二三

印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替致します

Printed in Japan　0315—77008—4604

注尊勝陀羅尼
一卷

今時世尊告諸帝釋言如是如是如汝所說
具足陀羅尼印說咒曰

那謨（此名如來秘密之藏摠指之門）薄伽跋帝（此名佛依止）
嚩日羅（此名金剛）迦（此名如來三昧之名）嚩日羅底毗失瑟吒耶
（此名金剛三昧之名）怛他（此名覺）薄伽跋帝（此名世尊）
（此名初者首新首頭名初）（此名降伏）
（此名入道之源名入道之首）（一切鬼神）
（此名三業清淨方根）
（此名如來眼耳鼻舌身意六根口根色名三業清淨）
（此名如來眼耳鼻舌身意六根口根色名三業清淨）
（一煩惱二不可忍惡三發惡）

光四移說光五聚義光六智慧光七食不可
思光八屋間新光九降伏一切光

（此名智慧既圓成平等之光）
（此名列根彼岸清淨自受法樂）
（此名如來出廣長舌相遍三千大千世界共證揚不可思議）
（此名自覺者）
（此名如盲人不識佛之類不可思議）
（此名出生清淨世界）
（此名列仏母於三種合上品中品下品合是）
（此名命過除一切罪障）
（此名列根彼岸清淨自受法樂）

施諸餓鬼飲食及水法 并序 印

沙門大廣智不空三藏 譯

先出衆生食事須如法周布稱〻皆若並須淨好或一分或少許或一器皆須如淨銅器中如法如是銅器白瓷〻如是瓷器可用漆器其飲食須和清水面向東立坐上以作法 夫欲施一切餓鬼飲食者先須發廣大心普請餓鬼先請誦此偈至一遍並作請法所獲福利衆報之門故著

比丘比丘尼其中發心奉持一器淨食

普施十方 窮盡虛空 周遍法界 微塵刹中 所有國土 一切餓鬼 先亡父母 山川地土 乃至曠野 諸鬼神等 諸衆來此 我今此處 普施淨食 願汝各〻 受我此食 持將供養 盡虛空界 以佛及聖 一切有情 汝與有情 普皆飽滿 之願汝身 乘此咒食 離苦解脫 生天受樂 十方淨土 隨意趣往 我等提心 行菩提道 當來作佛

凡　例

一　本巻には、弘法大師空海の伝記と思想に関する重要な参考資料の本文を四篇、ならびに、主な伝記資料の解題と年譜、近世以前の書写・板行になる空海の撰述書の諸本と注釈書の一覧、近代以後に発表された空海に関する研究論文の目録、などを収め、最後に本全集の総索引を付した（ただし、第五巻所収の『文鏡秘府論』『文筆眼心抄』については、本文の内容が他と著しく性格を異にするので、便宜上本巻の索引からは除外し、第五巻に独立して収める）。

*

一　伝記・思想に関する参考資料の本文は、空海伝の最古型を示す二篇、すなわち真済作と伝えられる『空海僧都伝』、『続日本後紀』所収の『大僧都空海伝』、ならびに『御遺告』（二十五箇条）を収めた。また、空海の思想形成の重要な典拠であり、真言宗でいわゆる『十巻章』の一冊として尊重される『菩提心論』をも併せ収めた。

一　右の四篇については、本文は二段組みとし、上段に訓み下し文、下段に現代口語訳を掲げ、各篇の末尾にそれぞれの注記と解説を収めた。

一　訓み下し文、現代語訳、訳注の作成にあたっては、『菩提心論』を除き、長谷宝秀編『弘法大師全集』（増補第三版）を底本とした。

一　各篇の構成を分かりやすくする目的で、適宜、本文の内容を分科し、区切りごとに一行あけとしたものもある。

〔訓み下し文〕

一　訓読は原則として前記『弘法大師全集』に付された訓みに従ったが、訳者独自の判断によって、訓みを改めたと

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ころもある。また、他本によって文の一部を補ったところもある（当該箇所の注記に示した）。

一　訓み下し文は、内容に従って適宜改行をほどこし、句読点・並列点（・）を入れて読みやすくした。また、底本で二行割書きとなっている箇所は、〈　〉を付して小活字で一行に組んだ。

一　漢文の助字、もしくは副詞・代名詞・接続詞その他に相当する漢字の多くを仮名書きに改めた。

（例）夫　若　是　此　之　斯　其　以　云　曰　言　謂　即　則　乃　又　亦　復　有　無　所　不　非　也

ただし、とくに意味を考えてそのままとした場合もある。

一　底本に使用されている古字・略字・俗字などの異体字は、おおむね正字体、もしくは現行の字体に改めた。

（例）漫荼羅・曼荼羅→曼荼羅　陁→陀　最→最　虗→虛　弃→棄　躰→体　刼→劫　虵→蛇

決→決　葉→葉　脉→脈　嘗→嘗　輙→輒

なお、あえて通行の字体に改めなかったものもある。

（例）辯・辨（弁）　龍（竜）　廻（回）　燈（灯）　毗（毘）　慧（恵）　癡（痴）　雙（双）

一　訓み下し文のみ、仮名遣いをすべて歴史的仮名遣いとし、難読語、仏教独自の読み方をする言葉をはじめ、漢字にはできるだけ多くのふり仮名をほどこした。

一　経論などの書名には『　』を、引用文に相当する個所には「　」を付した。

〔口語訳〕

一　下段に掲げた口語訳は、上段の訓み下し文と対照しつつ読むことができるよう、できるだけ原文に忠実に、かつ平易な訳をむねとした。

一　訳文中の（　）は、文意をとりやすくするため、原文にない語句を訳者が補ったことを示し、小さな〔　〕は、

原文に出てくる術語を補って、上の訳語との関係を明らかにしたものである。また小さな（　）で挿入したものは、上の術語に対する簡略な説明である。

〔訳注・解説〕

一　仏教の専門的な術語や難解な語句には、訓み下し文に指示番号を付して、各篇ごとの末尾に一括して注記を掲げた。

一　本文中の経論などの引用箇所の出典については、注記に『大正新脩大蔵経』の該当する巻数・頁数・上、中、下段の別を、（大正三一・一八九上）のように表示した。

一　各篇の訳注のおわりに「解説」を掲げてあるので、併せて参照されたい。

*

一　「解題」「年譜」以下の研究資料については、各々に付された凡例や後記をご覧いただきたい。

目

次

凡　例……v
空海僧都伝・大僧都空海伝……真保龍敞 訳注・解説……三
御　遺　告（二十五箇条）……遠藤祐純 訳注・解説……三五
菩提心論……福田亮成 訳注・解説……九七
*
主要伝記資料解題・年譜……二三三
撰述書の諸本と注釈書一覧……二九
研究文献目録……三四五
総　索　引……1
一般索引……3
書名索引……215
人名索引……232

年号索引……250
梵字索引……253

第八卷 研究篇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

空海僧都伝

大僧都空海伝

真保龍敞 訳注・解説

空海僧都伝

〔諱号出自〕

和上、故の大僧都、諱は空海、灌頂の号を遍照金剛といふ。

俗姓は佐伯直。讃岐国多度郡の人なり。その源、天尊より出づ。次の祖は、昔、日本武尊に従ひて、毛人を征して功あり。因りて土地を給ふ。すなはちこれに家す。国史、譜牒に明著なり。相続いて県令となる。

〔聡明修学〕

和上、生れて聡明。よく人事を識る。五、六歳の後、隣里の間、神童と号す。

真済記

和上、今は亡き大僧都、生前の実名は空海、灌頂を受けたときに、遍照金剛という密号を授けられた。

俗姓は佐伯の直で、四国讃岐の国、多度郡（今の善通寺市）に生まれた。先祖は天尊の系統で、むかし日本武尊にしたがって蝦夷を征伐し、その功績によって土地を給わり、その土地に住みついたことが、国史の記録に明らかである。そして、代々この土地の領主であった。

和上は生まれながらにして聡明で、よく物事をわきまえていたので、五、六歳になると、その土地では神童と呼ばれた。

年始めて十五にして、外舅二千石[一]阿刀大足に随ひて、[二]『論語』・[三]『孝経』及び史伝等を受け、兼ねて文章を学びき。

[四]入京の時、[五]大学に遊び、[六]直講味酒浄成に就いて、[七]『毛詩』・[八]『尚書』を読み、[九]『左氏春秋』を岡田博士[一〇]に問ふ。

〔出家宣言〕

博く経史を覧て、殊に仏経を好む。常に謂へらく、「我の習ふところは古人の糟粕[一一]なり。目前、尚益なし。況んや身斃るるの後をや。この陰[一二]、已に朽ちなん。真[一三]を仰がんには如かず」と。因つて[一四]『三教指帰』三巻を作り、[一五]優婆塞と成る。

〔苦修勤念〕

名山絶嶽[一六]の処、石壁孤岸[一七]の奥、超然として独り往いて滝留[一八]苦練す。或いは阿波[一九]

十五歳になったときは、母方のおじ、阿刀大足について『論語』・『孝経』をはじめ、歴史や伝記などの手ほどきを受け、文章を学んだ。

上京して大学に入り、直講の味酒浄成について『毛詩』（『詩経』）と『尚書』（『書経』）とを読み、『左氏春秋』（『春秋左氏伝』）を岡田牛養博士に習った。

ひろく（儒教・道教の）『経』や『史』などの中国古典を通覧したが、とくに仏教の経典を好んだ。常に次のようにいっていた。

「わたくしが習っているのは昔の人の粕であって、今、目前の用には役にたたない。まして死後においては、なおさらのことである。この肉体はやがて朽ちはててしまうであろう。真理こそ仰ぐに最高のものだ」と。

そこで『三教指帰』三巻を著わし、優婆塞（在家の仏教修行者）となった。

名山のきりたった絶壁のところや、淋しい海岸の石窟の奥で、世俗を離れて単身逗留して苦行した。ある時は、阿波の大滝嶽にのぼって、一

大瀧の峯に上りて修念すれば、虚空蔵[三〇]の大剣飛び来りて、菩薩の霊応を標す。或いは土左の室土崎において、目を閉ぢて観ずれば、明星、口に入りて、仏力の奇異を現ず。その苦節たるや、すなはち厳冬の大雪には葛衲[三二]を著て、顕露行道[三三]し、炎夏の極熱には穀粒[三四]を絶つて、日夕に懺悔す。

〔秘経感得〕

ここに廿の年に及んで剃髪して沙弥戒[三五]を受け、仏像に対して誓つていはく、「我、仏道に入りて、毎に要を知らんと求む。三乗[三六]・五乗[三七]・十二部[三八]、心の裏に疑ひありて、未だもつて決をなさず。仰ぎ願はくは、諸仏、我に至極を示したまへ」と。一心に祈請するに、夢に人ありていはく、「『大毗盧遮那経[三九]』、これ汝が心に修行していると、虚空蔵菩薩の大剣が飛んできて菩薩の霊験があった。ある時は、土佐の室土（戸）崎において目を閉じて観念をこらしていると、明星が口の中に飛びこんできて、仏力の奇瑞霊異が現われた。

その苦しみに耐えることたるや、厳しい冬の大雪の降る日に葛の下着だけを着たままで歩き、夏の炎暑には五穀などの食物を断って、朝も夕も懺悔の生活を送ったのであった。

さて、二十歳になると、剃髪して沙弥（見習いの徒弟僧）の戒を受けた。そして、仏像に向かい次のように誓願した。

「わたくしは仏道に入ってからは、いつも最もたいせつなことを知りたいと求めてきました。三乗とか五乗とか十二部とかいう教えを学びつくしましたが、心のうちに疑いが残っていて、まだはっきりいたしません。仰ぎ願わくは、諸仏よ、わたくしに究極の真理を示したまえ」と、一心に祈ってお願いしたところ、夢に或る人が現われて、

「『大毘盧遮那経』（『大日経』）こそ、そなたが求めるものである」と示

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com